

2022-10-23

詩篇 23 篇 「主はともにおられる」

- 主は私の羊飼い
- 義の道に導かれる
- 死の陰の谷
- 主のむちと杖
- いつまでも主の家に住む

詩篇 23 篇は多くの方に愛されている詩篇の一つで、私もよく口ずさみます。何度も何度も慰められ力づけられました。

この詩編でダビデがいかに主を愛し、頼り、主が恵みと祝福に満ちていることを見ることが出来ます。ダビデの起伏に富んだ人生において、ダビデは、主を畏れ、信頼する人生でした。ダビデは、華々しい成果を挙げたこともあります。心が緩んだ時に罪をおかしてしまいました。しかし、罪を指摘された時に、真摯に悔い改め、神に立ちかえりました。ダビデの人生の中心に主がおられました。この思いこそ、私に必要であることを見いだせます。ダビデの人生は苦難多き人生でした。

私たちの人生にも試練と苦しみがあります。しかし、主はともにおられるのです。世と世にある考え方、人の目を気にする生き方は私たちの心を萎縮させ、また、プレッシャーを与え、心は騒ぎ立ちます。しかし、キリストを仰ぎ見る時、心は平安になり、落ち着いて事を行うことができます。

私たちは主と親密な関係で居たいのに、そうすることが最も素晴らしいことなのに、サタンは惑わし、落胆させます。しかし主は「**私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでください**」だったので。このことは事実であり、希望はここにあります。

1.主は私の羊飼い。

私は乏しいことはありません。

1 節で、主は私の羊飼いとあります。なんと慰めに満ち、心に響く言葉でしょうか。なんと愛に満ちた関係なのでしょう。主は私たちを愛しておられます。主はこの不甲斐ない、弱き者のすべての面倒を見てくださるのです。羊は何もできません。羊にとって羊飼いが必要であるように、私たちには、主イエス様が必要です。イザヤ 40:11 では、「**主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、懐に抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。**」とあるように、羊を優しく導くお方です。ところが人はキリストでないものを頼ります。

ダビデは、詩編 23 篇で、主と私との関係を語っています。神を愛しており、待ち望み、信頼してい

ます。ダビデは一国の王であり、家庭では父でありました。また、若い頃は羊飼いであり、羊飼いがどのような仕事をするのかを知っていました。

羊飼いは羊を守り、世話をしていました。I サムエル 17:34-35 でダビデは、「しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。」羊を守るには、大きな危険が伴います。

牧するとは守る、育てる、導くことが求められ、そして食物を与え、必要なものを与えます。そして、人にとっては霊の食物が必要です。ヨハネ 6:35 でイエス様は、「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」と言われましたが、それをキリストが満たしてくれます。

羊は羊飼いを知っています。知っていて、ついていきます。毎日毎日羊飼いと一緒です。私たちの羊飼いな方は、私たちを導きます。

また、イエス様はヨハネ 10:11 で「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」と、と言い、15 節で「わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます。」と言われていきます。イエス様は羊のためにご自分のいのちを差し出しました。羊のためには、最も大切ないのちを捨てられたのです。ここに大きな感動と喜びがあります。私たちがどのような境遇の中にあっても、不条理な出来事、どん底に落とされたこと、辛い現実、噂話や陰口が耳に入って落ち込んだ時、取り返しのつかない失敗をしてしまった時、私たちの主は、羊飼いであり、私たちを助けてくださるのです。また、ペテロは、イエス様の十字架により罪から離れることができ、癒され、牧者のもとに帰ることができたと言っています。

イザヤ 53:6 には、「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」とあり、羊は従順でありながら頑なで臆病、迷いやすい性質です。

人間と同じだなと思います。自分に照らし合わせると、正にその通りで、全く頑なです。エゼキエル 34:15 には、「わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らを憩わせる。」とあり、それは大牧者イエス様において実現します。

羊と羊飼いは毎日 24 時間ともに過ごし、飼い主を知り、飼い主についていきます。私たちと主の関係の中で主を知っていきます。

ですから、私たちは飼い主である主に何もかも頼るのが最善です。自分で事を切り抜けようとすると、必ず痛手を受け、辛い境遇に陥ります。他人事ではありませんね。自分で何とかしようという思いは、それほど強く私たちの心に働いています。羊飼いのそばに行って、みことばを食べ、イエス様により頼む事、そうすれば足りないことはないのです。

ダビデは、主は必ず救い出してくださる方であることを知っていました。窮地に陥った時に、主を信頼したのです。私たちは絶えず、迫りくる危険があります。

高ぶりはいつも警戒しなくてはなりません。誘惑はいつも近づいており、攻撃は続いているのです。イエス様は、マタイ 26:41 で「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。自己中心的な私たちは、すぐに心が悪い思いにさらされて、悪い行いをしてしまうものです。そこから波及してしまうものがどれほどのものでしょうか。一つの不信仰な思いから出たものが、さまざまな形で傷をつけることがあるのです。

そして、ダビデは、乏しいことがないと言いました。主は、すべてのすべてであり、何もかも備えてくださる方であることを知っていました。詩編 34:10 では、「若い獅子も乏しくなり飢える。しかし主を求めめる者は良いものに何一つ欠けることがない。」と何一つ欠けることがないと言い切っています。私たちは何も求めているでしょうか。イエス様は、マタイ 6:25 で「何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。」と言い、「神の国と義を求めよ」と言われました。とても大切なことですね。あまりにも多くの情報が、様々な形で入ってきて、心配しなくてもよいことを心配したり、私は大丈夫だろうか、と思ったりします。

私たちは誰を頼っているのですか？イエス様です。イエス様があなたの必要を満たすと言っているのです。事実、主はイスラエルの民が、広大な荒野を旅していた時、彼らを見守り、なんと 40 年間何一つ欠けたものはありませんでした。

2.主は私を緑の牧場に伏させ

いこいのみぎわに伴われます。

緑の牧場、美しい風景を思い起こさせてくれます。実際に羊が緑の牧草地を過ごす写真を web で見ましたが、とても幸せそうな情景です。美しい自然の中で心を休めることは大切です。いこいのみぎわとあります。休息、そしてのどの渇きを潤す「水」が豊かにある所であって、そこに主が伴われます。

3.主は私のたましいを生き返らせ

御名のゆえに私を義の道に導かれます。

私たちのたましいは、疲れています。疲れ切っています。喉が渇いてカラカラの状態かもしれません。私たちのたましいは、喉の渇きを潤す、主が必要です。主は疲れたものに力を与えてくださいます。あまりにも忙しい日常に神を待ち望む静かな時が必要でしょう。イザヤ 41:1 で「わたしの前

で静まれ。諸国の民よ、新しく力を得よ。」とあるように、主の前に静まることはとても大切です。たましいが生き返るとは、義の道に行くことであり、不義の道は滅びです。義とは私たちの頑張りできないことであり、主の恵みによらなければなりません。私たちはみな、汚れた者で、不潔な衣のようですが、主は主の義を着させてくださったのです。私たちの自分の行いは、自分の道、自分のやり方を捨てて、自分をすべて捨てて、主に拠り頼まなければなりません。御名のゆえにとありますが、主は、約束を守り真実なお方であって、それゆえ、いのちの道である、義の道に導かれます。神は義なるお方です。申命記 32:4 で、「主は岩。主のみわざは完全。まことに主の道はみな正しい。主は真実な神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」

神は義なるお方であり、その道に導かれるのは恵みであり、賜物です。

Ⅱコリント 5:21 で「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」イエス様が私たちの罪とされ、イエス様の義が私たちのものとなったのです。

4.たとえ死の陰の谷を歩むとしても

私はわざわいを恐れません。

あなたがともにおられますから。

死の陰の谷とは、真っ暗で先の見えない足場の不安定な場所であり、絶体絶命の場所であり、状況であるでしょう。私たちの人生も光のない真っ暗な暗黒の道を通ります。死は、人間にとって最大の恐れです。ダビデは苦しみの極みを何度も通りました。それは、サウルに命を狙われるというものもありました。自分自身で陥った罪のゆえのものもありました。自分を喜ばせ、自分のやり方に執着する時、広い道、楽な道を通るとき、それは死の道です。イエス様は、マタイ 7:11 で、「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。」弱き肉の性質、高ぶりなど、それらは私たちを陥れ、途轍もない痛手を被り、その被害は周りに波及します。実際、私自身も何度も何度も自分のやり方で乗り切ろうと、失敗をし、痛手を受けました。近道はありません。イエス様こそ道であり、すべてのすべて、このお方を信じること、このお方を畏れることは、わざわいをおそれず、全能者の陰に宿ります。詩編 91:10-11 で「わざわいはあなたに降りかからず疫病もあなたの天幕に近づかない。主があなたのために御使いたちに命じてあなたのすべての道であなたを守られる。」と主はおっしゃっておられるのです。

ダビデが息子のアブサロムに背かれて、逃亡し、その姿はみじめでした。しかし、ここで、助け手が現れ食料が備えられました。このことはダビデにとって、大きな励ましでした。

ヤコブにはラバンの元で20年もの神様の訓練がありました。

ヨセフにおいては、ヨセフがエジプトへ奴隷として売られたのが 17 才、それからポティファルに仕えてから、20 才で牢獄に入れられ、エジプトの王ファラオの前に立ったのが、30 才でした。なんと 10 年も牢獄に入れられていました。しかも濡れ衣によって入れられていたのです。ヨセフはその辛い境遇の中で、「主はヨセフとともにおられ、恵みを施し」(創世記 39:21)とあり、23 節では「主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださった。」のです。この 10 年という長い年月を支えたのは主です。主は苦しみを通して、彼を練られ、希望を与えられました。このことで教えらえるのは、主はあなたに何かを教えられようとしているということです。試練や苦しみを訪れた時、とても辛く、目の前が暗くなります。主よ、何でこのようなことが起きるのですか。このことにおいては、私はもうどうにもなりません。お手上げ、絶望することが何度あったでしょうか。そして、現在もあります。でも、しかし、あきらめずに祈っていきましょう。ヨセフは、その後 30 歳でエジプトの宰相となりましたが、その器として成長していました。それは主がともにおられた、ということです。主がともにおられる時、何をしても栄えることがわかります。

ですから、よく考えてください。この世のことに目をそらされてはいけません。この世は、目先で安心を得ようと働きます。ヨセフの人生の中で現わされた危機を乗り越えたことから教えられるのは、人間的な方法ではなく、神がともにおられるということでした。神を信頼し、全力を注ぎ、忠実に従った人生でした。

しかし、牢獄でなく、心の中においても闇はあります。中傷、悪口、噂話、敵意など、自己中心から来る闇です。ヘブル 12:1 に「**いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて**」とありますが、私たちは、何がまつわりついているのかを調べて、それを捨てなければなりません。それは、私たちが前を進もうとするものを阻むからです。

ダビデは、詩編 27:3 で「**たとえ私に対して陣営が張られても私の心は恐れない。たとえ私に対して戦いが起こってもそれにも私は動じない。**」

と言いました。辛い状況の中におられる方もおられます。敵は私たちをいつも陥れようと狙っているのです。しかし、主がともにおられるのです。そして、主が采配を振るってくださいます。

**あなたのむちとあなたの杖
それが私の慰めです。**

これは、羊飼いが持つむちそして、杖です。むちとはこん棒で、羊を打つためではなく、外敵である野獣が襲う時に投げたり、毒蛇をたたいたり、盗賊と戦ったりするものでした。杖は先が丸くなっている長い棒です。

杖は羊が谷底や穴などに落ちた時に助け、群れから迷い出たら、正しい道に戻し、群れに連れ戻すために使います。

羊飼いであるイエス様は、私たちを敵から守り、また杖である御霊を与えてくださり、私たちの内におられ、私たちを慰めてくださいます。ヨハネ 16:13 で「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださるのです。

また、主は愛のゆえに私たちを打ちます。ヘブル 12:5-6 で「わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」霊の父に服従して生きましょう。それは聖さにあずからせるためであり、義という平安の実を結ばせるためです。

5.私の敵をよそにあなたは私の前に食卓を整え

頭に香油を注いでくださいます。

私の杯はあふれています。

ダビデは、まさに敵の前で食卓を整えていただきました。私たちが教会で食事をともにします。そして、主にある交わりをし、主の食卓に与かっています。この世は戦いの場ですが、キリスト者の集まりは主の家です。主の家で食事をする、交わる、勧めあう、励ましあう必要があります。

そして、頭に油を注がれました。香油は高価なものでした。そして、相手にもてなしと敬意を現わすものです。Iヨハネ 1:20「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています」私たちが真理に導いてくださる聖霊があります。

私の盃はあふれているとあります。イエス様がお持ちの栄光の富をもって、私たちが何かをしたからではなく、ただ恵みによって、私の盃はあふれていると言うことができるのです。イエス様が与えてくださる水はヨハネ 4:14にあるように「しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」素晴らしいみことばですね。エンゲデイの岩場から滝となって流れる水場を思い起こします。ここはダビデがサウルから追われ、隠れた場所となっていて、イスラエル旅行でも行ったところでした。とても美しいところです。水はとどまることなく流れています。

6.まことに私のいのちの日の限り

いつくしみと恵みが

私を追って来るでしょう。

私たちの思いを遥かに超えたことを主はなさってください。いつくしみとは、ヘブル語で「トーブ」で、良くしてくださるという意味があります。神はそのようなお方であって、良いものを与えて続けてくださいます。そして、恵みです。主が一方的に与えてくださった愛、変わらない愛です。たとえ間の中で苦しんだとしても、神はいつまでも変わらず、私たちを愛し、いつもともにおられます。

私はいつまでも主の家に住みます。

主の家に住む、キリストとともにいる、過ごす、教会での礼拝を思います。エペソ 2:21-22 で「このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」

礼拝することはとても大切で、素晴らしいことです。ダビデは、いつまでも主の家に住みます。と、神の家にいることがどれほど素晴らしいものなのかを知っていて、ダビデの強い意志を見ることができます。そうです。私たちは神とともにおります。羊飼いイエス様にしっかりと結びつくこと、そのことに熱心になっていきましょう。

最後にヨハネ 15:5 をお読みします。イエス様は次の通り語りました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」